

市民文化財研究員活動報告書 27

2023. 3

仙台市富沢遺跡保存館

は じ め に

地底の森ミュージアムが開館して26年が過ぎ、これまで100万人を超える方々のご来館を頂きました。これも皆様方のご厚情の賜物と感謝申し上げます。

当館では、学校教育活動との緊密な連携を図るとともに、市民の生涯学習を支援するため、各種体験教室・講座を開催しております。また、その一環として遺跡や考古学について深く学びたい、そうした意欲を持った方々の自主的な学習を支援するために、市民文化財研究員育成という特色ある事業を行ってまいりました。これまで、25期178名が市民文化財研究員の事業を修了し、多くの方々が当館のボランティアとして様々な活動を行っております。

今年度、第26期市民文化財研究員5名が、それぞれのテーマに沿った活動を行い、その活動成果を報告するために本書を作成しました。これからの研究員の活動に期待するとともに、今後とも皆様方のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

令和5年3月

公益財団法人 仙台市市民文化事業団
仙台市富沢遺跡保存館
館 長 武山 剛久

目 次

I 市民の自主的な生涯学習活動への支援

II 市民文化財研究員とその活動

III 活動支援概要

IV 活動報告

土偶の特徴や魅力を探る

—大野田遺跡・伊古田遺跡を中心に— 相澤 直子 8

仙台の縄文時代の竪穴住居跡を学んで 青木 妙子 12

実験ドングリクッキー作りからの学び 赤間ひろみ 16

「石っこ賢さん」宮沢賢治が石器に触った可能性について
高橋 香織 22

仙台の縄文遺跡—足元に広がる悠久の痕跡— 八巻 裕子 28

例 言

1. 本書は令和4年度市民文化財研究員活動報告書である。
2. 本書の執筆は、IVの各活動報告を市民文化財研究員がそれぞれ行い、その他は仙台市富沢遺跡保存館である。全体の編集は館員鈴木英梨が行った。
3. 報告書作成に際して、主に参考とした文献や資料は各活動報告に参考文献として記載している。

I. 市民の自主的な生涯学習活動への支援

1. 基本構想における位置づけ

地底の森ミュージアムの建設は、1988年の富沢遺跡第30次調査における2万年前の森の跡と旧石器人のキャンプ跡の発見を契機としている。それは、この調査成果の重要性から、仙台市が調査対象地区の保存を決定し、その活用を図るために、翌年、基本構想策定委員会を設け、策定された構想において「考古系総合博物館」の建設がうたわれたことに始まる。この構想では、博物館の様々な活動の中で、生涯学習活動の基本方針の一つとして、「市民が、文化財に関するさまざまな情報にふれ、興味や関心に応じて自らのテーマを追求できるようにする」とし、「市民の考古学教室」などを通して、自主的な活動を支援する方法が考えられていた。これは、文化財、特に埋蔵文化財について、その大切さを知ってもらうために、それまで行われてきた発掘調査の現地説明会や考古学に関するさまざまな講座、講演会、展示会などとともに、より積極的な方法を推進していくことを示したものであった。

2. 生涯学習活動と市民文化財研究員

地底の森ミュージアムでは、生涯学習活動として、来館者に自由に参加してもらう「たのしい地底の森教室」、「石器を使ってみよう」コーナー、参加者を公募する「体験協教室 親子でつくろう古代米」、「考古学講座」、「富沢ゼミ」などを行っている。こうした活動の参加者には、もっと遺跡や考古学を知りたいと思う市民や新たに興味関心を持つ市民がおり、専門的な質問を受けることもある。また、一般の来館者についても、その関心は富沢遺跡だけではなく、地域や時代を越えていることを認識させられる。

こうしたこともあり、基本構想にもうたわれていた市民の自主的な活動の支援をどのように行っていくかが開館を前後するなかで検討された。施設面では館内に市民活動のための専用スペースはなく、また、研修室の利用や利用日の工夫、支援する市民の数など、制約は多かったが、平成8年度に第1期の「市民文化財研究員」15名を募集し始め、令和3年度まで25期にわたって合計178名の活動成果を『市民文化財研究員活動報告書1～26』として刊行してきた。平成20年度からは報告書をホームページで公開している。

令和4年度は、第26期市民文化財研究員として8名が参加し、うち5名がそれぞれのテーマに沿って自主的に活動を行った。令和4年度は、引き続き新型コロナウイルス感染症拡大防止に努めながら活動を行った。

Ⅱ．市民文化財研究員とその活動

1．目的

考古学や遺跡に興味をもっている市民が、地底の森ミュージアムを核として、その支援を受けながら、自主的にそれぞれのテーマを学び、歴史や文化をより身近なものにすることを目的としている。

2．活動期間

年度の1年間とする。定員は10名(今期は令和4年4月13日～令和5年3月15日)
※8・9・12月は自主活動期間とした。

3．支援の内容

- (1) 研究場所の提供
 - ・地底の森ミュージアム1階研修室の開放。
- (2) 研究の補助および研究方法についての相談受付
 - ・学芸員による考古学についての講義。
 - ・学芸員による個人ごとの対応。
- (3) 収蔵図書の利用
 - ・室内での閲覧。必要箇所の複写については有料。
- (4) 市民文化財研究員証の発行
 - ・登録日あるいは相談があるときは、これを提示し入館。

4．活動内容

- (1) 毎週水曜日午前2時間の学習(地底の森ミュージアム1階研修室)
登録日(館員1名が在室)
- (2) 年1～2回開催する見学会での学習(遺跡や博物館施設の見学)
- (3) 活動報告書の刊行
- (4) その他
 - ・館内では、市民文化財研究員証をネームプレートとして付ける。
 - ・登録日が休館日にあたった場合は学習を休みとし、翌日に順延しない。
 - ・研修室が使えない場合があるため、事前に予定表を配布して周知する。

Ⅲ. 活動支援概要

1. 概要

研究員はそれぞれのテーマで館内外で活動を行った。それについては活動報告に述べられている。ここでは館での支援活動の概要を総括する。

令和4年4月13日～7月27日	登録日学習の開催日
8月～9月	自主学習期間
10月～11月9日	登録日学習の開催日 活動報告執筆のための相談
12月	活動報告執筆のための自主学習期間
令和5年1月11日～3月15日	活動報告執筆のための準備、相談

2. 第26期市民文化財研究員修了者（五十音順）

相澤直子 青木妙子 赤間ひろみ 高橋香織 八巻裕子

3. 週1回の半日単位の学習

今年度は、週1回の登録日を水曜日の午前に設け、活動を行った。

4. 登録日と出席者数

令和4年	4月13日	オリエンテーション【8名】	
	4月20日	講義【7名】	4月27日 講義【7名】
	5月11日	講義【6名】	5月18日 講義【8名】
	5月25日	館外活動【7名】	6月1日 講義【8名】
	6月8日	講義【8名】	6月15日 講義【5名】
	6月22日	館外活動【6名】	6月29日 講義【6名】
	7月6日	講義【6名】	7月13日 講義【5名】
	7月20日	館外活動【6名】	7月27日 講義【6名】
	10月5日	自主活動報告【6名】	10月12日 講義【4名】
	10月19日	館外活動【6名】	10月26日 館外活動【6名】
	11月2日	報告相談【7名】	11月9日 テーマ発表【5名】
	12月1日	報告準備【5名】	12月8日 報告準備【4名】
	12月15日	報告準備【4名】	12月22日 報告準備【4名】
令和5年	1月11日	報告準備【1名】	1月18日 報告準備【3名】
	1月25日	報告準備【1名】	2月1日 報告提出【5名】

2月 8日 報告校正【6名】 2月15日 報告校正【0名】
2月22日 報告校正【5名】 3月 1日 報告校正【4名】
3月15日 報告会・修了式【4名】

5. 館外活動

5月25日は仙台市縄文の森広場の見学、6月22日は富沢遺跡周辺の遺跡散策、7月20日は史跡陸奥国分寺・尼寺跡ガイダンス施設の見学、10月19日は郡山遺跡および郡山中学校のピロティ展示の見学、10月26日は名取市歴史民俗資料館の見学を、希望する当館ボランティアと共に行った。見学にあたり、展示案内等にご協力いただきました関係各位のみなさまにこの場を借りて御礼申し上げます。

IV. 活動報告

考古学あるいは遺跡をもとにして、研究員がそれぞれの興味関心をもとにテーマを設定し、調査を行った活動成果をまとめた。第26期市民文化財研究員は、令和4年3月の募集で、申込は8名であったが、2名の方が年度途中で辞退し、6名の活動となった。

それぞれの活動をみると、これまで自身が持っていた課題を深めて調べた方、当館での学習活動や他施設を見学する中で新たに興味関心を持った内容を調べる方など様々だった。レポート作成自体が初めてという方も多く、レポートの作成方法についての説明も行いながら活動していただいた。それぞれが取り組んだテーマについては、遺跡や博物館の見学、関係施設への調査、文献やインターネットなどからの情報収集など、各自が様々な方法で行い、課題と向き合っていた。

こうした研究員の活動は、それぞれのペースを大切にしてい、今回は5名の活動を報告することにした。



5月11日 研修室での講義



10月19日 郡山遺跡見学

土偶の特徴や魅力を探る―大野田遺跡・伊古田遺跡を中心に―

相澤 直子

はじめに

初めて土偶に出会ったのは「遮光器土偶」であった。その眼鏡をかけたような特異な顔立ちと宇宙人を思わせるような姿に心を掴まれ、それ以来土偶について興味をもつようになった。

今回の文化財研究員の講座を受けている間にも自身の身近な場所に魅力的な土偶が出土されていた事を知り、特に「大野田遺跡」と「伊古田遺跡」の土偶に興味がわき、この二つの遺跡の背景を調べながら土偶の魅力の考察を行うこととした。



写真1 大野田遺跡のハート形土偶（左）と伊古田遺跡の国内最大級土偶（右）

1 仙台市内の縄文時代と土偶

土偶がつくられていた縄文時代は、約13,000年前に気候・環境の変化に対応して土器などを持つようになった狩猟採集文化で約10,000年以上も続いている（仙台市史編さん委員会編1995）。

仙台市内に目を向けてみると、良好な漁場と豊富な食料に恵まれ、成熟した狩猟採集文化が展開されており、このような環境で仙台市内の縄文文化は形成されてきたようだ。仙台市内では仙台市史が刊行された時期までに約240ヶ所にのぼる縄文遺跡が確認されており、いずれも河川に面した場所に立地した

水系ごとにまとまりをもっている。

名取川水系に属する「大野田遺跡・伊古田遺跡」は、自然堤防に立地する遺跡で、発掘調査により縄文時代の竪穴住居跡、墓、配石遺構、遺物包含層などが発見され、集落があったことが証明されている。遺物は土器や石器、ペンダント、土偶などである。土偶は10数の仙台市内の遺跡から出土されている。今回特に注目している大野田遺跡と伊古田遺跡については、『仙台市史特別編2 考古資料』（仙台市史編さん委員会編1995）をもとに、以下に特徴をまとめた。

	大野田遺跡	伊古田遺跡
年代	縄文時代後期前半 約3500年前	縄文時代後期中頃 約3500年前
所在地	太白区大野田	太白区大野田
出土遺物	土器、石器他、土製品、耳飾り、ヒスイ製垂飾品、特殊な形の土器等祭祀に関するもの多数	石さじ・石錐・土器石鍬、礫石器等多量の遺物
土偶の特徴	270点以上の土偶が出土。ハート型土偶が多い。ハート型の顔立ちで丸い目と長い鼻を持ち、後頭部にあたる部分が長く伸び（いわゆるチョンマゲヘヤー）、てっぺんに渦巻模様が現れる。幅広でいかり肩。安定感のあるふんばった太い足が特徴。中実土偶で足が短く自立出来る。その他にもいろいろな顔の土偶が出土。	仙台市有形文化財指定のほぼ完形の土偶4点（立像3点、座像1点）が出土。立像3点は前方に突出した顔、いかり肩で細長い胴体。大きくふんばった脚が特徴。国内最大級の大きさ（41.4cm）の土偶の顔面は欠けており頭部は編込み状の結髪。胸には乳房、腹部には突起。正中線、下半身には刺突が施文されている。別の立像2点は顔面付き。うりざね顔で高い鼻、いかり肩で頭部には結髪。入墨状の文様あり。

表1 二つの遺跡の特徴

2 大野田遺跡と伊古田遺跡の類似点

生活の道具として存在した土器にたいして、祭祀に関わるものとして土偶は存在したと言われる（山田 2019）。そこから、土偶は縄文時代の人々にとって大切な存在だったと思われる。

繊細な文様から大胆な身体の造形、不可思議な顔など様々な表現がなされている。

同じ地域で出土された土器と土偶は同じ文様が施されている事が多いといわれ（菅田 2017a）、大野田遺跡と伊古田遺跡の発掘調査報告書をみても、詳しくは辿ることはできなかったが、伊古田遺跡では土器に沈線や刺突文がみられ（仙台市教育委員会 1995）、土偶にも同じような文様が確認されている。

大野田と伊古田は年代や地域が近く、2つの遺跡から出土された土偶について類似点を考えたところ、一見まったく相容れない風貌や形と考えていたが、仙台市縄文の森広場のコーナー展示のなかで、次のような内容を確認することができた（仙台市縄文の森広場―「東北の縄文遺跡跡―仙台市伊古田遺跡とその世界―」コーナー展示 2022/12/1～2023/2/12 より）。

展示の中では、何点か類似点・相違点が示されており、顔についてはハート型から楕円形や三角形へ変化し、胸や腹の膨らみも強調されるようになったということ（図1）、頭頂部については、ちょんまげ状の頭も小さくなり、頭頂部も水平から斜めに変化していると考察していた（図2）。

このような土偶の表現方法の変化が大野田

遺跡と伊古田遺跡の間に生じたと考えられるようだ。

なお、山田上ノ台遺跡（縄文時代中期）から顔だけの土偶が出土しているが、大野田遺跡のハート型土偶の顔に類似している。更に上野遺跡（縄文時代中期）からも土偶の頭部や胴部、脚部が出土し、その尖ったアゴとつり上がった目、面長い顔は伊古田遺跡の土偶にも類似している（写真2）。

仙台市内の大野田近辺で出土されたそれぞれの土偶をとってみても、形に「ゆるやか」なつながりがあることがみてとれ、地域の交流も考えられるのではないかと思った。

これまでは、見つかった地域や時期によって独自の土偶がつくられていたと単純に考え



写真2 山田上ノ台遺跡の土偶（左）と上野遺跡の土偶（右）



図1 大野田遺跡と伊古田遺跡の土偶の顔と胸の変化

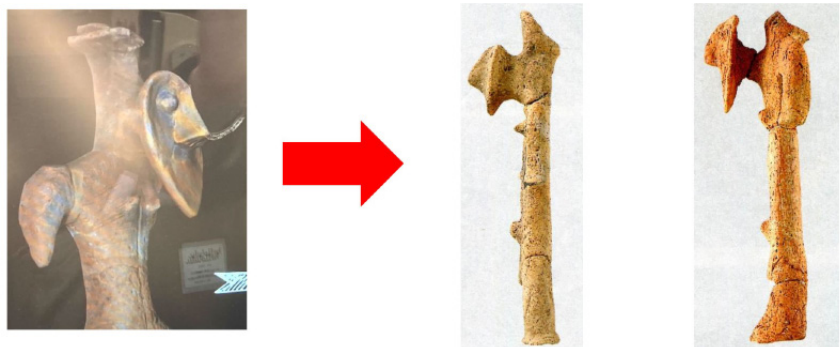


図2 大野田遺跡と伊古田遺跡の土偶の頭頂部の変化

ていたが、縄文の森広場の展示を見たことで、土偶同士に共通点や地域性があることがわかり、これまでの土偶に対する印象が変わった。今後の土偶の見方が変わる、大きな気づきとなった。

まとめ

土偶とはそもそも人形の焼き物であり、その作られた理由や使い方については諸説あり、未だ謎も多い。

再生・安産祈願や病氣治癒、狩猟成功祈願などの人の願いを託すものである説。今まで出土している土偶は大半が何らかの形で破損しており、故意に壊したものと思われることから、儀礼的・祭祀的なものである説。その一方縄文人の生活環境に密接した植物（オニグルミなど）をモチーフとして作られたものと唱えた説（竹倉 2021）もあり、さらに謎が深まるばかりである。

土偶を知れば知るほど諸説の多様性を理解しなければならない。出土された土偶を見れば見るほど様々な形や体を大胆にデフォルメし稚拙なようでいて、高度な技術で緻密に作られている顔・形に出会う。

縄文土器や土偶に影響をうけた文化人も少なくなく、芸術家の岡本太郎氏も土偶をモチーフにして大阪万博のモニュメント「太陽の塔」を作っている。作家の川端康成氏も土偶マニアとして知られ、ハート型土偶を蒐集していたようだ。

土偶の定義や捉え方は様々なあるが、土偶はアート作品とも言え、見る者を惹きつける側面もある。

単純にただ造形に惹かれて土偶の世界に興味を持ったのが始まりであった。

前述したように、私にとって身近な場所から出土した二つの全く異なると考えていた土偶に繋がりがあり、ゆるやかな変化があったのだという事がとても新鮮な驚きであった。

互いの集落の縄文人達がどのように流れを受け入れ、そして独自の土偶の形を作り上げていったかを想像する楽しみも与えてくれた。

大野田周辺だけでなく、関東・東北北部でも多く出土されているハート型土偶は、どのようなネットワークで繋がりを持つにいたったのだろうか。離れた地域で交流していたことも見えてくるようで、当時の縄文人の生活様式も想像させてくれる。

土偶の出土数は全国でおおよそ 1 万点といわれ（国立歴史民俗博物館編 1992）、縄文時代が 10,000 年続いたとすると、年に僅かな数の土偶しか作られていない計算になる。そこから土偶はとても特別感のあるものと思われる。この特別感こそ不思議な魅力を持つ。

土偶が作られた目的の明確な理由はいまだなく、謎が多いからこそ、自由に考えを巡らせ想像をふくらませることもできる。それこそが私の興味をさらにそそらせるものとなっている。

これからも様々な土偶に出会い、土偶を通して縄文人の心や縄文時代を感じてみたいと思うようになった。

参考・引用文献

国立歴史民俗博物館編（1992）「時期別土偶出土数データの集成第一版」『国立歴史民俗博物館研究報告第 37 集』国立歴史民俗博物館

仙台市史編さん委員会編（1995）『仙台市史特別編 2 考古資料』仙台市

仙台市教育委員会編（1995）『仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ 伊古田遺跡』

仙台市教育委員会

誉田亜紀子（2017a）『土偶のリアル』山川出版社

誉田亜紀子（2017b）『土偶界へようこそ』山川出版社

竹倉史人（2021）『土偶を読む』晶文社

山田康弘（2019）『縄文時代の不思議と謎』実業之日本社

引用図版

写真1～2 仙台市史編さん委員会（1995）『仙台市史特別編2 考古資料』仙台市

図1 仙台市史編さん委員会（1995）『仙台市史特別編2 考古資料』仙台市の画像を引用し作成

図2 （左：大野田遺跡土偶）仙台市縄文の森広場 2022/12/1～2/12「東北の縄文遺跡－仙台市伊古田遺跡とその世界－」コーナー展示より筆者撮影画像および（右：伊古田遺跡土偶）仙台市史編さん委員会（1995）『仙台市史特別編2 考古資料』仙台市の画像を引用し作成

仙台の縄文時代の竪穴住居跡を学んで

青木 妙子

はじめに

市民文化財研究員の活動場所である地底の森ミュージアムでは、富沢遺跡を保存・公開している。富沢遺跡は旧石器時代の遺跡で、約2万年前の樹木群がシカのフン等と共に発掘され、たき火跡と人が石器づくりをした跡も見つかっている。この時代の人々は、一か所に留まらずに暮らしており、キャンプのような生活をしていただろうと考えられている。それ以降の人々はどんな暮らしをしていたのだろうか。研究員の活動を続けていく内に、各時代の住居について関心が向くようになった。特に、活動の中で訪れた仙台市縄文の森広場の展示が印象に残っている。竪穴住居内部の様子を人形を使って再現している展示の中には、父親と母親、子どもがおり、一家だんらの温かな様子は現在と変わらないのではないだろうかと感じた。そこで、今回のレポートでは縄文時代の住居について調べてみようと思った。

仙台市内からどんな竪穴住居跡が見ついているのか、『仙台の遺跡（改訂版）』（仙台市教育委員会編 2005）を参考に、関心を持った遺跡の住居跡についてまとめようと思う。

1 仙台市内で見つかった竪穴住居跡

（1）三神峯遺跡

太白区三神峯の丘陵上の三神峯公園にあり、代表的な縄文時代の集落跡。1973年の調査で縄文時代前期初めの竪穴住居跡が3軒発見され、仙台市内で初の縄文時代住居の発見として注目された。1975年の調査で同じ時期の竪穴住居跡が5軒、限られた範囲に分布していることから遺跡全体ではかなりの

数が存在すると考えられている。土器埋設遺構一基と多量の土器や石器が発見された。



写真1 三神峯遺跡の竪穴住居跡

（2）沼遺跡

七北田川南岸の河岸段丘上に位置し縄文時代の中期末頃の竪穴住居跡8軒が発見されている。縄文時代の遺構が集中するのは遺跡の北西部で、約3,000㎡ほどの広さである。竪穴住居跡の平面形は円形が多く、つぶれた楕円形や隅丸方形のものもあり、床面積は平均で14㎡ほどである。主柱穴の構成は4本柱、3本柱、2本柱があり、それぞれに数本の補助柱が付く、がっしりした物である。それぞれの棟には土器埋設石組部、敷石石組部、掘り込み部からなる複式炉がある。炉全体の長軸は1.9～2.7mと長大で、竪穴住居跡のほぼ半径に相当する。



写真2 沼遺跡の竪穴住居跡

(3) 六反田遺跡

太白区大野田字五反田・六反田にあり、地下鉄富沢駅の北東側に位置する。旧策川沿いに形成された標高 10 m～12 m の自然堤防に立地し、遺跡の広がりには長さ 500 m、幅 100 m ほどである。縄文時代中期から後期にかけての居住域が確認されている。

中期では中頃の竪穴住居跡 1 軒、末頃の竪穴住居跡 1 軒が発見されている。

後期初めでは竪穴住居跡 12 軒、柱穴列 3 列、炉跡 2 基がある。

魚骨、オニグルミなどの自然遺物などが出土しており、生業活動を含めて、この時期の集落の実態を考えるうえで貴重な成果となった遺跡である。



写真3 六反田遺跡の竪穴住居跡



写真4 六反田遺跡で見つかった縄文土器

(4) 山田上ノ台遺跡

太白区山田上ノ台に所在し、名取川北側の河岸段丘上の南側に張り出す平坦な台地の南端部に位置する。標高は 50～55 m で遺跡の面積は約 9.8ha である。

1980 年の調査で縄文時代中期末の大規模な集落跡であることが判明した。発見された

縄文時代の遺構は竪穴住居跡 38 軒、土坑（地面を掘りくぼめた穴）320 基以上、遺物包含層（ゴミ捨て場と考えられる）3 か所などである。竪穴住居跡は東側に 22 軒、西側に 16 軒と東西 2 群に分かれ、その間は共同の広場と考えられる。竪穴住居跡の時期は中期の終わり頃のもので、大きさは直径 3.5～5.5 m と広く、炉は土器を埋め込んだ部分と床を掘りくぼめて石を敷き詰めた燃焼部からなる「複式炉」で、縄文時代中期後半の特徴的なものである。

山田上ノ台遺跡は、縄文時代当時の集落をうかがい知ることのできる多くの遺構や遺物が存在する遺跡である。



写真5 山田上ノ台遺跡の竪穴住居跡



写真6 写真5の炉に埋設されていた土器

(5) 観音堂遺跡

青葉区下愛子字観音堂にあり、愛子盆地の中央南より標高 113 m の河岸段丘上に立地する。縄文時代中期末頃の竪穴住居跡 5 軒、炉跡 2 基、埋設土器・土坑などが発見された。この遺跡の竪穴住居跡の平面形は隅丸方形形状のもので、それぞれ複式炉が設けられ、床面に河原石が敷き詰められた敷石住居が発見された。

この住居跡には新旧2時期があり、新しい住居跡は古い住居跡を拡張して造られていた。2基の炉跡には共に縄文土器が埋設されており、埋設土器遺構からは大型の深鉢が出土している。



写真7 観音堂遺跡の竪穴住居跡



写真8 観音堂遺跡で見つかった埋設土器

まとめとおわりに

今回調べた5つの遺跡だけでも、仙台市内ではさまざまな竪穴住居跡が見つかることが分かった。

沼遺跡の補助柱がつく竪穴住居跡や観音堂遺跡の古い住居を新しく拡張していると考えられる竪穴住居跡、山田上ノ台遺跡のように38軒ものたくさんの住居跡が見つかることなどから考えると、縄文時代の人々というのは、すぐれた大工さんであると感じた。河原石を床に敷き詰めていたりしているとは思っていなかったのも、とても驚き、感心した。定住生活をする中で、その日のことだけではなく、もう少し先のことを見つめて計画できる暮らしだったからこそ、技術が進んでいったのだろうか。

また、竪穴住居跡から炉の跡と一緒に出土する土器も、同じ縄文時代でも形や大きさ、

文様も変化していることに驚いた。縄文時代の人々は、センスの良いデザイナーでもあったのだと感じた。

山田上ノ台遺跡では、「台地縁辺部の東側と西側に住居群が分かれ、その周囲に土坑群がつくられ、住居群の間の中央部分を広場とみると全体は環状のムラであったと考えられる。環状のムラでは、中央の広場に墓地のある事例が多く、先祖と結びつきの強い日常生活が営まれていた」と考えられている（仙台市教育委員会編 2005）。

先祖と強い結びつきを感じていた縄文時代の人々は、家族を大切に過ごしていたことと思う。河原石を敷いた床に座りながら炉を囲み、穏やかで温かな家族だんらの時間を過ごしていた時代でもあったのではないかと感じた。



写真9 仙台市縄文の森広場の展示
家族だんらの様子がうかがえる

参考・引用文献

仙台市教育委員会編（2005）「仙台の遺跡（改訂版）」仙台市教育委員会

仙台市教育委員会編（2018）「文化財せんだいNo. 122」仙台市教育委員会

仙台市教育委員会編（2020）「文化財せんだいNo. 128」仙台市教育委員会

仙台市教育委員会編（2020）「文化財せんだいNo. 129」仙台市教育委員会

仙台市富沢遺跡保存館編（2017）「仙台市富沢遺跡保存館地底の森ミュージアム 常設展示案内 第2版」仙台市教育委員会

引用図版

写真1～8 仙台市教育委員会編（2005）「仙台の遺跡（改訂版）」仙台市教育委員会

写真9 筆者撮影

実験ドングリクッキー作りからの学び

赤間 ひろみ

はじめに

私はすぐ疲れる。体力がないのである。とりあえず、手取り早くできることは歩くこと。理由もないとやる気がでないので、月1回七北田公園のガイドウォークに参加した。季節は秋。たくさんドングリが落ちていた。引率の先生の「縄文人もこのドングリ食べていたんですよ」という言葉に、今この時間の私と縄文の人は同じようなドングリを見ていて、時を越えて繋がっていると思うと感慨深かった。

市民文化財研究員の講座で、山形・押出遺跡から、縄文時代前期（約5000年前）クッキー状の炭化物が出土していることを知った。

いにしえの人もクッキーを好んで食べていたのだろうか？ 甘いのかな？ おなか为空くとすぐ食べられたのか？ 今のこの時代にいる私は腹が空けばコンビニなどに行って好きなお菓子を選んですぐ食べることができるが、縄文の人は思い立ってからどのくらい時間がかかって口にすることができたのだろうか？ と疑問がわいた。

そこで、実際に自分が縄文人になったつもりでクッキーを作ってみようと思った。

1 縄文時代のドングリの分布と調理方法

まずは、縄文時代のドングリの分布と調理方法について調べた。

次山信夫は、「遙か昔、日本の気候は今よりずっと寒く7000年前ぐらいには、気候が暖かくなり日本は亜寒帯から亜熱帯となった。亜寒帯の木にはドングリはならない。ドングリがなる木は温帯の中でも寒い地方や山地に育ち、冬になって葉を落とすクヌギ類や

ナラ類などと、温帯の温暖な地方の一年中葉を落とさない照葉樹のカシ類、シイ類、一年中気温が高い亜熱帯に育つシイ類などだ。各地の遺跡からでてきたドングリも東日本（クヌギ類とナラ類）と西日本（カシ類とシイ類）では違いがある。あく抜きしないとどングリが食べられなかった東日本の人たちは大変なことであっただろう」と述べている（次山2002）。

また、山田昌久によると、「ドングリは米と比べても劣らないほどカロリーがあり、たんぱく質や脂肪も含まれているので縄文時代の主食になったものと思われる。ただ、ほとんどのドングリはタンニンを含んでいるので渋くて食べられない。そこで縄文人はタンニンを取り去るため大変手間をかけて「あくぬき」をした。あくを抜くため水でさらしたり、粒のままあるいは砕いて袋に入れ、1週間以上も水にさらす。また灰を加えて長時間煮つめた。遺跡の中には水さらしの遺跡も発見されている。詳しいことは明らかでないが、木の実を粉にした物をベースに、季節の食材を煮込んだシチューのような料理が多かったと思われる。また遺跡から真っ黒に炭化した食べ物が出土している。この中にはシカやイノシシの肉を主体にしたクリやクルミがまじったハンバーグや、クリを主体にイノシシやシカの肉を混ぜたクッキーがある」とのことである（山田2000）。

2 ドングリクッキー実験

今回は、木の実を主体にしたクッキー状のものを作ってみることにした。

実際にドングリクッキーを作ってみるために、実験を次のような手順で行った。

- ① ドングリ採取
- ② 下準備
- ③ 粉砕
- ④ クッキー生地作り、形成
- ⑤ 火おこしと焼き
- ⑥ 試食、味見

実験の内容と感想をまとめていく。

①どんぐり採取

調べもせず、公園に行って落ちているものを、とりあえず拾ってみたが、途中から本当に食べられるのだろうかという疑問が湧いてきた。再度本を読んでから知識をある程度つけた方がいいと悟り、また読んだだけでは理解できず、二度目はガイドウォークの先生にお願いし一緒に拾っていただいた。1時間ほどかけて3種類。マテバシイ、スダジイ、ウバメガシである。

②下準備

虫食いや古くなったものを取り除くために、水に浮かべる。コップに浮かせてみると3個ほど浮いてきた（写真1）。作業時間は15分。



写真1 水に浮いてきたドングリ

また、マテバシイ、スダシイはそのままでも食べられるが、ウバメガシはあく抜きが必要である。水にさらしたり、流水に長期間つけたりという方法があるが、今回は、水をかえ煮立たせて、あく水を捨てて再度沸騰という工程を4～5回繰り返し一晩水にさらした。だが、まだ苦みは残った。作業時間はウバメガシで2時間。そして14日ほど天日干

し、殻が割れて、そこから渋皮を取る、また殻が自然にむけないものはたたいてはがしての工程で大変難渋した。作業時間は2時間ほどであったが、楽しくない作業だった。

③粉砕

すり石とくぼみ石になるような石を庭から見つけて、マテバシイ3個をのせ、たたいてみた。はじけ飛んだ（写真2）。



写真2 ドングリをたたいたようす

たたき続ける力加減を調節して摺りつぶした。生乾きのものは大体6分ぐらいで砂粒ぐらいの大きさになった。2回分で15mlぐらいである。レシピ上110gほど必要なので、作業時間に換算すると90分ほど、粉末状まですりつぶすことは、乾燥しすぎたドングリではかなり根気と力技が必要であった（写真3、4）。



写真3 ドングリをすりつぶしているようす



写真4 2回分計測したドングリ粉

④クッキー生地作り、形成

縄文時代に実在する材料を考え、3レシピを作ることにした。インターネットでドングリクッキーを作成しているサイト・動画を参考にした（レシピ1「松伏町公式動画チャンネル」、レシピ2「オトコ中村の楽しい毎日」、レシピ3「ずっとヴィーガン暮らし」）。

〈レシピ1〉

どんぐり粉	40g
小麦粉	40g
はちみつ	10g
サラダ油	15g

材料を袋の中でこねるとちょうどいい具合の堅さでひとつにまとまる。サラダ油なのでサラサラしているから、べたつかない。小さく円形にまとめることが容易であった（写真5）。早く焼けるように薄くしてみる。はちみつが濃厚なので十分混ぜるように20分はこねた。



写真5 レシピ1でつくったドングリクッキー

〈レシピ2〉

どんぐり粉	最終的に 60g
くるみ	20g
長芋	30g
塩	1g

もともとのレシピでは、どんぐり粉 100g、くるみ 30g、長芋 120g、塩小さじ 1/2 であったが、すりおろした長芋がサラサラしすぎていた。水分が多くて袋の中でうまくまとまらず分量を調整した。それでもドロドロ泥状、形成困難であった。袋を使用していたので、先端を切って、絞りだしてみたら、何とか渦巻き型クッキーになった（写真6）。



写真6 レシピ2でつくったドングリクッキー

〈レシピ3〉

ドングリ粉	40g
バター	20g
強力粉	20g
砂糖	15g
重曹	1g

バターが白く残り溶けないためこれまた難渋した。獣の油はきっと事前に溶かしておかなければならなかったと思われる。べたべた感があり、小さくするのは難しかったため大きな形のままにした（写真7）。レシピ1～3までを形成し、作業時間は計 110 分、約 2 時間だった。



写真7 レシピ3でつくったドングリクッキー

⑤ 火おこしと焼き

火おこし具や石皿は無いので、今回は古びた火鉢で炭を使う。火がつかず煙だけが発生したりして最も四苦八苦した。ただ炭に火がついてからは安定した火力が保てた。火力を保つためには、空気調節が大事である。遠赤外線遠火でゆっくり焼いた。飾りつけで入れたレシピ2のくるみが焦げたりもしたが、こまめに両面返しながら、レシピ1と3は30～40分は焼いた（写真8）。水分が多いレシピ2は1時間ほどかかった。作業時間は全部で計2時間だった。



写真8 焼いている時のようす

⑥ 試食、味見

レシピ1、2、3ともまあまあおいしい。それぞれに個性のある味で、焼きたては温かいから余計美味しく感じた。塩味も悪くない。バターの香りは食欲がわいた。苦みがまったくないので普通に口にできたが、ドングリの歯ごたえ、食感が全くなくなってしまってい

た。

その他気づいたことは、卵についてである。今回は卵を使用しなかった。もし使ったとすると、卵拾いの時間。はちみつ採取も考慮せねばならない。

4 結果

①から⑤までの作業時間で、計515分、約8.5時間かかった。その他火おこし時間や天日干し日数、またあく抜き具合によって必要時間は変化する。最低でも食べたいと思ってから口に作るまで8.5時間はかかることがわかった。そのまま食べられるスダジイであれば煎るだけで食べられるから、クッキーにしない方がいいのかもしれない。

5 まとめ

頑張ればスダジイなどを使って翌日には縄文クッキーを口にできたかもしれないという結果になった。

縄文人の主食と考えられているドングリは貯蔵穴などに保管していたが、保存できても一冬ぐらいだったろうと考えられている。ドングリを殻ごとゆで、天日干しでカラカラに乾燥させて「イロリ」の上の棚に置いておくと、乾燥を保つことが出来、「イロリ」からの煙で虫がつかず保管できることも知っていたと考えられている（次山2002）。

時間がかかるあく抜きであったが、必要不可欠な長期保存食であったと思う。

そして、「ドングリ採取は子供から老人まで行え、狩猟のように危険を伴わない森からの恵みだった」と考えられている（岡崎2014）。

今回は材料の分量を計測したが、縄文時代の人々はどうだったのだろう。ゆで時間などどうやって知り得ていたのだろう。ゆでた水の色や自分の舌で確かめながら、長年の経験から分量を見極めていたのだろうか。また今回あく抜きがうまくいかず、すりつぶしたド

ングリ粒を、結局またゆでて、上澄みの水を捨て沈澱させ、又ゆでて上澄みを捨てという工程を4～5回ほど繰り返えし、最終的には布と紙でこしてあんこようになったドングリ粉を使用した（写真9）。



写真9 こしたドングリ粉

その途中でまた考えた。皆で歌ったりおしゃべりしながら作業したのかな、こんな風にしたら早いとか皆で知恵を出し合ったり、細かい網目の布をこしらえるのを考えたりしたのかもしれない。縄文人が創意工夫を重ねて、新しい道具を作り、森の幸をいかしそれが今、私たちまでつながっている様々な道具になっているのだろう。時を越えて繋がっていると不思議な気持ちになったが、縄文時代の人々とつながっていくと何か新しい物を生み出すことが出来るのではないかと思える。

また、現代に生きている私たちは時間に追われる生活に慣れてしまっているが、クッキーを作っている間にじっくりと火を見つめていると、ゆっくりと時が流れていくのに逆らわず、時間というものに目を向けていけた。

縄文人は今の私たちにそんなにせかせかせないで生きなさいと教えてくれているように感じた。

あく抜きにかなり時間がかかったが、どんなに時間がかかっても一生懸命全力を尽くすことが重要であると学んだ。

参考・引用文献および Web サイト

岡崎務（2014）『縄文人のくらし大研究 衣食住と暮らしをさぐる！』 PHP 社

こんだあきこ&スソアキコ（2018）『おもしろ謎解き「縄文」のヒミツ』 小学館

徳永桂子（2004）『日本どんぐり大図鑑』 偕成社

次山信夫（2002）『日本の食事①ドングリクッキー』 ポプラ社

古川清行（2009）『読む日本の歴史 - 日本を作った人びとと文化遺産』 あすなろ書房

本山浩子（2009）『体験しよう！縄文人のくらし②くらしと食事』 汐文社

山田昌久（2000）『調べ学習日本の歴史①縄文のムラの研究』 ポプラ社

山田康弘（2014）『縄文人がぼくの家に来てきたら！？』 実業之日本社

ずっとヴィーガン暮らし『課題「縄文クッキー」まとめました』 <https://retoriro.hateblo.jp/entry/2020/04/25/081739>

（最終閲覧日 2023.2.1）

松伏町公式動画チャンネル「【まつぶしSHP#16】どんぐりクッキーをつくろう！（まつぶし歴史講座）」 https://youtu.be/b4vvy-S_FZk（最終閲覧日 2023.2.1）

未知の料理へ楽しく挑む オトコ中村の楽しい毎日「アクが強すぎて食べられないドングリを縄文人に倣って食べる」 <https://otokonakamura.com/donguri2013-3/>

（最終閲覧日 2023.2.1）

※本文中に使用した写真はすべて筆者撮影。

「石っこ賢さん」宮沢賢治が石器に触った可能性について

高橋 香織

はじめに

宮沢賢治は岩手県出身の詩人・童話作家である。そして小・中学生時代に「石っこ賢さん」とのあだ名がつくほどの鉱物コレクターだった。盛岡高等農林学校（現・岩手大学農学部）時代や、研究生として稗貫郡（現・花巻市）に地質調査で行っていた。その後稗貫郡立稗貫農学校で講師をしており、生徒たちを連れてイギリス海岸のある北上川と猿ヶ石川を訪れ、そこでバタクルミの化石や足跡化石を発見した。

今回、宮沢賢治が石器等の石でできた遺物に触れた可能性はないのか調べてみた。

今回調べた内容は、大きく分けて次の四つである。第一に、宮沢賢治が生きていた当時の考古学の歴史、および東京帝室博物館（現：東京国立博物館）に何が飾られていたのかと、宮沢賢治と博物館について。第二に、当時の岩手県の考古学等遺跡発掘に関係した学者について。第三に、宮沢賢治と考古学と関わりがあるのかについて。第四に、宮沢賢治がどこを地質調査したのかについて調べた。ただし、宮沢賢治は岩手県各地を旅し、あちこちの山を登ったといわれているが、どのルートを通って登ったのかが調べきれなかったのが今回の調査からは外すこととする。

なお、本文からは宮沢賢治のことは賢治と記す。

1 宮沢賢治が生きていた時代の考古学について

賢治は1896（明治29）年に岩手県稗貫郡に誕生し、1933（昭和8）年、満37歳で死去している。

この時代の日本の考古学に関して特筆すべ

き話題は、1877（明治10）年、アメリカの動物学者エドワード・モースが大森貝塚を発見し、科学的な発掘調査が行われたこと、1916（大正5）年京都帝国大学考古学講座が開設されたことである。

また、東京帝室博物館は1871（明治4）年文部省に博物局を設置、翌年湯島聖堂で文部省博物館として最初の博覧会を開催し、これをもって博物館の創立・開館とした（東京国立博物館 HP）。1877（明治10）年3月時点の帝室博物館八棟には次のような「史伝部、教育部、法政部、陸海軍部、芸術部、天産部（動物、植物、鉱物）、農業山林部、工芸機械部、大英博物館寄贈品」が展示物として飾られていた。1889（明治22）年10月、出土された埋蔵物が博物館に収蔵される取り決めがなされた（関2005）。

賢治は1916（大正5）年3月に盛岡高等農林修学旅行では鉱物陳列館を尋ね、詩を書いている。8月には「独逸語夏期講習会」の受講のために上京し帝室博物館を訪れた。「東京」と題したノートには「1916年8月に博物館・植物館」というメモが書かれているが、日程的にこの講習会の時のことだろう。1916～1921（大正5～10）年の間に盛岡高等農林時代の友人保阪嘉内（1896～1937、明治29～昭和12）に手紙を送り、鉱物館、植物館、歌川広重や喜多川歌麿の浮世絵を鑑賞した事を書いていた。また、童話『気のいい火山弾』（1921、大正10年？執筆）の中で、ベゴ石の専門家と思われる四人の人たちが「大英博物館にだってない」といい、「東京帝国大学地質学教室行」と書いた大きな札がつけられ、持って帰った、という話がある（宮沢・天沢他編1999）。このことから、賢

治は帝室博物館に何度も通っており、博物館がどんな場所なのかは知っていたということになる。

但し、各博物館公式 HP やいわての博物館案内を調べたところ、どうやら陸前高田市立博物館（1959（昭和 34）年 1 月開館）が東北地方第一号の公立登録博物館らしく、賢治の生きていた時代に岩手県内には博物館がなかったと考えられる。

2 岩手県の考古学遺跡発掘に関係した学者について

岩手県の考古学調査は古くから行われていた。1672（寛文 12）年「藩譜拾遺」の中に紫波郡で古塚が発掘され、金具などが見出されたのが古い記録で（斎藤 2000）、その後明治時代に人骨が発見された陸前高田市の中沢浜遺跡、大正時代には大洞貝塚などが調査されている（岩手日報社出版部編 2000）。主に東京帝国大学、東北帝国大学の教授、県史跡調査委員などが岩手県を調査していた。1922（大正 11）年、住田町の蛇王洞穴の調査をしていた岩手師範学校博物学教諭心得（当時）の鳥羽源蔵（1871～1946、明治 4～昭和 21 年）と東北帝国大学助教授（当時）の早坂一郎（1891～1977、明治 24～昭和 48 年）にくるみの化石を渡すために賢治が交流していたことが分かっている。童話『猫の事務所』（1925、大正 15 年発表）に二匹の猫「トバスキー」「ゲンゾスキー」が登場するが、鳥羽源蔵の名前がモデルになっており、童話に登場させたいと思うほどの人物であったと考えられる。学問を通じて交流のあった賢治と鳥羽だったが、鳥羽の先生であった早坂にクルミの化石を送り、後日三人でイギリス海岸を調査した（近藤 2015）。このことから、賢治は遺跡、特に石器の話をしていたのかまでは分からないが、遺跡や化石の研究者との交流があった事が伺える。

3 宮沢賢治は考古学と関わりはあるのか

ここで賢治の通った学校の授業内容をみしてみる。賢治は花巻川口立花城尋常小学校、盛岡高等農林学校に通い、岩手県稗貫農学校で講師をしていたが、『宮沢賢治全集』によると、いずれの学校でも歴史の授業自体はなかった。更に盛岡中学校の受験科目には歴史はなかった。しかし、岩手県立盛岡中学校で歴史の授業があったようだが、歴史の授業内容は調べきれなかった。

当時の大学で、現在の大学にある一般教養にあたる授業があったかは定かではないが、こちらも『宮沢賢治全集』によると教授陣の専門科目に歴史学などの文系の科目がないため、ここで考古学の知識は得てないと考えられる（宮沢・天沢編 1999・若尾 2021）。

賢治は膨大な書籍を読んだといわれており、上野図書館にも訪れたようだ。借りて読んだのだろうか。また、購入した本の記録は余り残していないようで、少ない記録の中に考古学関係の本や歴史書はなかった（栗原 1990）。

賢治は鉱物コレクターではあったが、残念ながら殆ど捨ててあり、残されていた数少ない鉱物には黒曜石は残されていない。ただし、童話『銀河鉄道の夜』（1924～、大正 3 年執筆、未完）と童話『台川』（1921～1926、大正 10～15・昭和元年執筆）では石器として使われた「黒曜石」、同じく『台川』ではこちらも東北地方の石器の材料であった「頁岩」が出てきている。台川付近で黒曜石は発見されておらず、黒曜石や頁岩を石器の材料として認識していたかは不明だが、黒曜石と頁岩の存在は知っていたことが分かる。

詩『北上山地の春』（1924、大正 3 年作成）に「打製石斧のかたちした…」とある。1921～1926（大正 10～15）年の間は賢治が教諭をしていた時期にあたるので、その頃までには石斧の存在を知っていたことになる。

4 宮沢賢治がどこを地質調査したのか

賢治が作成し、現在でも残っている地質図は二枚ある。盛岡高等農林時代、賢治が2年生の時に授業の一環として同級生と共に作成した「盛岡付近地質図」(1917)と、同学校に研究科として在籍中の1918～1920(大正7～大正9)年にかけて、教官と共に調査し作成された「岩手県稗貫郡主要部地質及土性略図」(1922)である(加藤他2011)。「盛岡付近地質図」では現盛岡市とその周辺の市町村を、「岩手県稗貫郡主要部地質及土性略図」では現花巻市の広範囲を調査していた。

以下の地図(図1、2)はいずれも当時の土性略図の大体の場所を現在の地図に照らし合わせたものである。

「盛岡付近地質図」は範囲を4分割して調査したらしく、左上には「宮澤」の名前が書かれているため、滝沢村・雫石町の調査をしたのだと考えられる。しかし、「岩手県稗貫郡主要部地質及土性略図」の全範囲を賢治は

調査したのか、そして当時どんな地質調査をしていたのか調べきれなかった。

現在岩手県で発掘された遺跡は12887箇所である(全国こども考古学教室HP)。滝沢市・雫石町と花巻市で調査された遺跡は多く、特に花巻市は1000を超える遺跡があるようだ(花巻市HP)。岩石などから賢治たちが調査した場所を特定している研究もあるので、ここを突き詰めると石器を触ったかどうか考える余地はあるかもしれない(鈴木2011、加藤2011)。

まとめ

今回調べた内容からは賢治が石器に触れた可能性は分らなかった。今後、賢治との関わりについてさらに調べるとすれば大きく分けて次の二つである。

第一に明治～大正時代の考古学のことやその周囲の情報をもう少し深く調べることである。また、当時の地質学の調査方法、当時の

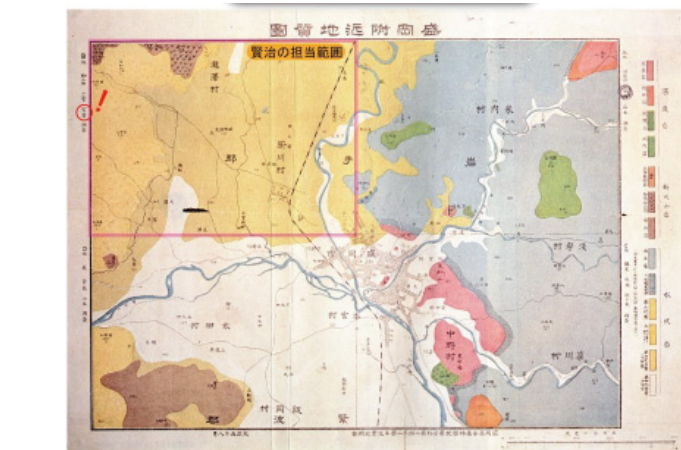


図1「盛岡付近地質図」(上)と現在の盛岡市周辺(下)



図2「岩手県稗貫郡主要部地質及土性略図」(上)と現在の花巻市周辺(下)

鉱物学とその授業内容、中学時代の歴史の授業内容に旧石器・縄文・弥生時代を学ぶ機会があったのかである。

次に賢治が歩いた場所についてである。

まず山について。私の浅はかな考えで恐縮だが、道路の造成や建築物を建てる等の開発の予定のない場合は、山自体を発掘調査はしないのではないと思う。しかし、旧石器・縄文・弥生時代に作られた石器で岩手県産の、特に岩手県の山で手に入れられるような石で作られたものを調べ、賢治が登った山と照らし合わせると何かわかるかもしれない。

反対に岩手県沿岸部にも宮沢賢治は訪れている。その時、貝塚付近を散策しているかを調べてみたい。

更に中学時代・高等農林時代に修学旅行などで地質旅行に県外に出ており、具体的にどこを辿ったのかを調べ、遺跡と照合すると石器に触れた可能性について考察できるのではないだろうか。

そして、賢治と出会った人々の中に歴史について詳しい人がいたかどうかや、信心深い賢治が埋蔵物が収集された寺社を訪れていたのかを調べる必要があるだろう。

ここからは私が考えた事や感じた事である。

宮沢賢治の研究をしている人は非常に多いが、大半は文学的、語学的、教育学、心理的観点からの研究である。反面、地質学・鉱物学・化学的等（この分類が正しいのかは別として）所謂理系的視点から研究する人が少ない。賢治は岩手県の作家で、更に賢治の研究者には残念ながらかなり前に亡くなられた方も何人もいらっしゃる。その為県外の資料や古い本を集めるには図書館の資料では限界があり、何か1行でもヒントがあるのではと、あちこちから本を取り寄せたりもした。今回のレポートを書くにあたり、そこが苦労した点だった。そもそも私が地質学・鉱物学・考古学の知識も不十分で、岩手県の地理のこと

も詳しくない。もっと基礎知識があればスムーズに調べられたのかと思う。

一つ調べると次々に疑問が出てくる。その疑問を解こうとするとまた次の疑問が湧く。実は本論文提出日数日前に「和賀郡土性図」というものがあることも知ったが、その土性図に賢治が関わったのかどうか、また賢治がなんらかの目的で北海道の博物館に行ったらしいが、北海道のどこの博物館でどんな展示物が飾られていたのか調べきれなかった。次々に疑問が溢れ出る状態は、情報を整理するのが大変であり、時間も掛かったが実に楽しかった。答えのない調査だから調べるのは苦労するのは覚悟の上だったが、それでも楽しかった。もしまた今回のような機会があれば、引き続き賢治が石器に触った可能性について、調べていきたいと思った。

参考・引用文献および web サイト

板谷英紀（1979）『賢治博物誌』れんが書房新社

板谷英紀（1989）『賢治と岩手を歩く』岩手日報社

稲村哲也（2019）『博物館概論』放送大学教育振興会

岩手県博物館等連絡協議会加盟館（2020.8）『いわての博物館案内』（パンフレット）

岩手日報社出版部（2000）『いわて未来への遺産 遺跡は語る旧石器～古墳時代』岩手日報社

奥田弘（1975）『宮沢賢治の東京における足跡 宮沢賢治研究叢書 2 賢治地理』學藝書林

加藤碩一（2011）『宮澤賢治地学用語辞典』愛智出版

加藤 禎一, 青木正博, 長森英明, 澤田結基
(2011)「イーハトーブの石たち ―宮沢賢治
の地的世界―」『地質調査総合センター研究
資料集, no. 529』産業技術総合研究所地質
調査総合センター

栗原敦・編 (1990)『日本文学研究資料新集
26 宮沢賢治 童話の宇宙』有精堂

近藤健史 (2015)「宮沢賢治の大正十一年 -
宮沢賢治と鳥羽源蔵の出会い -」『研究紀要
第 28 号 竹中眞幸教授退職記念号』日本大
学通信教育部

斎藤忠 (2000)『郷土の好古家・考古学者た
ち 東日本編』雄山閣出版

斎藤忠 (2001)『日本考古学の百年』東京新
聞出版局

鈴木健司 (2011)『宮沢賢治文学における地
学的想像力〈心象〉と〈現実〉の谷をわたる』
蒼丘書林

関秀夫 (2005)『博物館の誕生―町田久成と
東京帝室博物館』岩波新書

長田敏明 (2006)「早坂一郎―日本における
現存主義の古生物学の先駆者―」『地球科学
60 巻』地学団体研究会

原子朗 (2013)『定本 宮沢賢治語彙辞典』
筑摩書房

福島泰樹 (1996)『宮沢賢治と東京宇宙』
NHK ブックス

細井計、伊藤博幸、菅野文夫、鈴木宏 (2009)
『国誌 岩手県の歴史』山川出版社

細田嘉吉 (2007)『石で読み解く宮沢賢治』
蒼丘書林

宮城一男 (1989)『宮沢賢治 農民の地学者』
築地書館

宮沢清六、天沢退二郎他編纂委員 (1999)『校
本 宮沢賢治全集 1～16』筑摩書房

宮沢清六、天沢退二郎他編纂委員 (2009)『校
本 宮沢賢治全集 別巻 補遺・索引』筑摩
書房

武藤康史 (2007)『旧制中学入試問題集』ち
くま文庫

森浩一・企画 高橋信雄、昆野靖・共著 (1996)
『日本の古代遺跡 51 岩手』保育社

若尾紀夫 (2021)『同級生が語る宮沢賢治
盛岡工党農林学校と宮沢賢治 120 年のタ
イムスリップ』岩手大学農学部北水会

いわて遺跡地図

<https://maizobunkazai-web.pref.iwate.jp/>
(最終閲覧日 2023.2.28)

岩手県立博物館～岩手山を望める丘のミュ
ジウム～

<https://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/> (最終
閲覧日 2023.2.28)

かだいおうち (鹿大応用地質学講座) 地質
学と考古学

[https://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/oyo/ad-
vanced/geology/archaeology.html](https://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/oyo/advanced/geology/archaeology.html) (最 終 閱
覧日 2023.3.3)

雫石町の歴史 (2・町内の主要遺跡紹介)

[https://www.town.shizukuishi.iwate.jp/
docs/2014120800196/](https://www.town.shizukuishi.iwate.jp/docs/2014120800196/)
(最終閲覧日 2023.2.28)

全国こども考古学教室 岩手県―行ってみよ
う～全国遺跡・博物館マップ～

[https://kids-kouko.com/historical_site_area/
tohoku/pref_iwate/](https://kids-kouko.com/historical_site_area/tohoku/pref_iwate/) (最終閲覧日 2023.2.28)

滝沢市公式 HP 滝沢市の指定文化財
[https://www.city.takizawa.iwate.jp/commu-
nity/manabu_atsumaru/culture_art/bunka-
zai.html](https://www.city.takizawa.iwate.jp/community/manabu_atsumaru/culture_art/bunka-zai.html) (最終閲覧日 2023.2.28)

東京告知る博物館 HP「東博について 館の
歴史 12. 年表 東京国立博物館の歩み」

[https://www.tnm.jp/modules/r_free_page/
index.php?id=155](https://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=155)
(最終閲覧日 2023.03.14)

遠野市立博物館―遠野市

[https://www.city.tono.iwate.jp/index.
cfm/48,25002,166,html](https://www.city.tono.iwate.jp/index.cfm/48,25002,166,html)
(最終閲覧日 2023.2.28)

東北大学総合学術博物館のすべて みちのく

はアンモナイトの宝庫 早坂一郎

http://www.museum.tohoku.ac.jp/past_kikaku/ammonoidea/tohokuUniv/tohokuUniv4.htm (最終閲覧日 2023.3.3)

日本考古学協会

<https://archaeology.jp/>
(最終閲覧日 2023.2.28)

日本地質学会

<http://geosociety.jp/>
(最終閲覧日 2023.2.28)

花巻市公式 HP- 花巻の遺跡紹介 -

<https://www.city.hanamaki.iwate.jp/bunkasports/bunka/sogobunkazai/1008001/1002066.html>

(最終閲覧日 2023.2.28)

埋蔵文化財センターいわて遺跡ナビ

<http://www.iwate-bunshin.jp/imaibun/gmap/index2.html> (最終閲覧日 2023.2.28)

陸前高田市公式 HP- 陸前高田市立博物館 -

<https://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/sos-hiki/kanrika/hakubutsukan/index.html> (最終閲覧日 2023.2.28)

引用図版

図1・2 (上) 加藤禎一, 青木正博, 長森英明, 澤田結基 (2011) 「イーハトーブの石たち - 宮沢賢治の地的世界 -」『地質調査総合センター研究資料集, no. 529』産業技術総合研究所地質調査総合センター

(下) 国土地理院 地理院地図 (電子国土 Web) <https://www.gsi.go.jp/tizu-kutyu.html>

仙台の縄文遺跡―足元に広がる悠久の痕跡―

八巻 裕子

はじめに

2021（令和3）年7月、北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に登録された。筆者は、縄文時代の人々の生活と精神文化に大変興味を持っていたが、仙台市内には有名な縄文遺跡が少ないと思っていた。しかし、今年度の市民文化財研究員となり、考古学関係の講座を聴講し、施設見学を通じて、たくさんの縄文遺跡が市内にあることを知った。市内の遺跡は規模が小さいものが多い。しかし、市内全体を調査すれば、出土した遺構や遺物の重要性、遺跡間の繋がり等がわかるのではないかと考え、今回のレポートのテーマとして詳記する。

I 市内における縄文遺跡の現況

『仙台市史特別編2 考古資料』（仙台市史編さん委員会編 1995）では、仙台市内に約240か所の縄文遺跡が確認されている。その資料に詳記された45遺跡について、一覧表を作成し、全体の概要を把握することにした（表1）。

遺跡の分布は、広瀬川、名取川、七北田川の水系ごとにまとまりがあるため、水系別に一覧表を作成した。

一覧表は、①遺跡名 ②住所 ③目印等 ④時期区分 ⑤住居跡 ⑥土坑 ⑦配石 ⑧土器 ⑨土偶 ⑩石器 ⑪その他 ⑫特記事項の12項目についてまとめた。

＜補足説明＞項目の内容について

②住所：遺跡の住所の地名等（紙面の容量上詳細は省略）とした。

③目印等：②を補足するため、目印となる公共的な施設との位置関係を記載した。施設が遺跡の上にある場合には「～付近」と表現

した。施設に近接した場所の場合には「～の北（又は西東南）」と表現した。遺跡の範囲が広大な場合には「～周辺」と表現した。

④時代区分：縄文時代は、約1万3000年前から（仙台市史編さん委員会編 1999）、弥生時代が始まる約2300万年前までの間と捉えられている。使用されていた土器の特徴などから古い順に「草創期、早期、前期、中期、後期、晩期」の6期に区分されているため、その時代区分を使用した（縄文時代の年代と時期区分、土器編年の関係は表2を参照）。

⑤住居跡：縄文時代の竪穴式住居跡が見つかる場合には、「有」又は数量を記載した。住居跡の根拠となる炉跡が見つかる場合には、（）内に「炉跡有」又は数量を記載した。

⑥土坑：縄文時代の土坑が見つかる場合には、「有」又は数量を記載した。土坑の種類として落し穴、貯蔵穴、（底面が広い）フラスコ状の穴等があるため、種類が判明している場合には、（）内に種類と「有」又は数量を記載した。

⑦配石：縄文時代の配石遺構が見つかる場合には、「有」又は数量を記載した。
※ 配石とは、環状に配列された礫群や立石を中心とする施設のことである。自然石を組み合わせた組石には、円形や楕円形に石を敷き詰めた敷石などがある。信仰や祭祀、墓制に係わるものであると考えられている。

⑧土器：縄文時代の土器が見つかる場合には、「有」又は数量を記載した。

⑨土偶：縄文時代の土偶が見つかる場合には、「有」又は数量を記載した。

⑩石器：縄文時代の石器が見つかる場合には、「有」又は数量を記載した。

⑪その他：上記以外の遺構・遺物又は特殊性のある遺構・遺物の出土について記載した。

⑫特記事項：遺跡から分かること等を記載した。※ 表1は、『仙台市史特別編2 考古資料』（仙台市史編さん委員会1995）に掲載された内容と数に基づいて作成した。「13 相ノ原遺跡」に関しては、「仙台市の遺跡（仙台市HP）」の情報を使用した。

II. 縄文遺跡の分布について

遺跡は、いずれも河川に面した丘陵や河岸段丘・沖積地の自然堤防などに分布していた（図1）。各水系における分布を時期区分ごとに見ると、草創期・早期・前期の比較的古い遺跡は上・中流域に分布し、後期・晩期の新しい時期の遺跡は下流域に、中期の遺跡は全域に分布する傾向が認められた。

その理由と考えられるのは、“縄文海進”である。縄文時代の海岸線は、現在より内陸側に大きく移動していた。旧石器時代から縄文時代の過渡期にあたるおよそ1万3000年前頃は、氷河期が明けて海面が急上昇したためであると考えられている。長い縄文時代の間にも海岸線が激変し続けていた。海面がマイナス10メートルに達したと推定される約7500年前は、仙台平野の周辺において最

も海岸線が後退した時期にあたると考えられる。当時は、現在の宮城野区福室付近と若林区今泉付近が海岸となっており、当時の平野部には広大な低湿地があった。約6500年前には、海面がマイナス5メートルまで上昇したと推定されている一方、海岸線は前進に転じて、七北田川流域の潟や低湿地が河川の土砂により埋め立てられていったと考えられる（海岸線の変化については図2を参照）。

気候の変化とそれに伴う地形の激変により、人々の暮らしやすい場所が大きく変わ

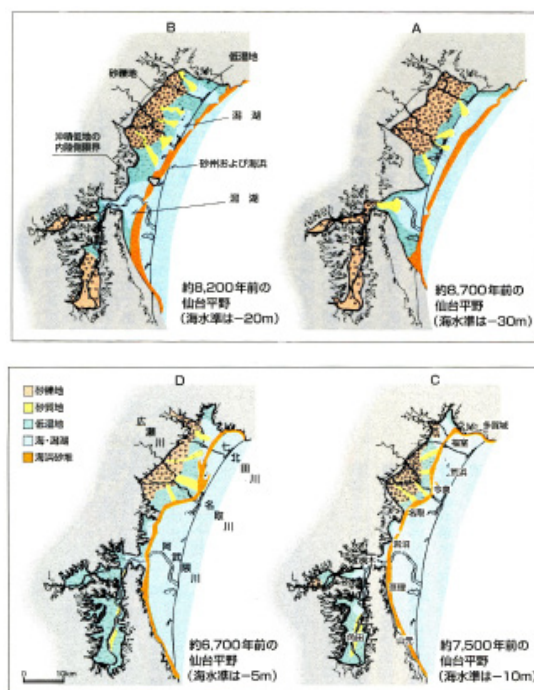


図2 仙台平野の海岸線の移り変わり

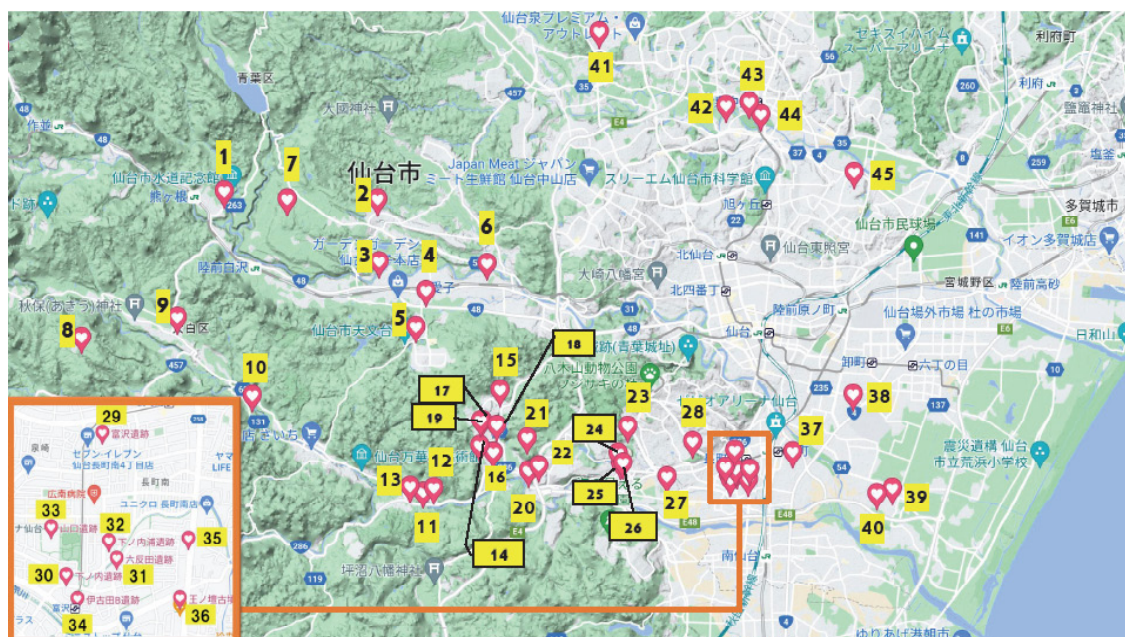


図1 縄文遺跡マップ（Google map に加筆）

り、遺跡の場所が内陸部から平野部へ移動していったのである。

水系ごとの遺跡数を見ると、名取川水系に遺跡が集中していた。ただし、早くから開発が進み市街地や住宅地になった広瀬川下流域や七北田川中流域には、遺跡が存在した可能性があるのではないかと考えている。

表1をみると、近接している遺跡が数多く分布していた。名取川中流域のNo11～13は、太白区坪沼地区の狭い段丘面に位置していた。No14～22は、茂庭台から人来田周辺に位置していた。名取川下流域のNo23～26は、山田・鉤取周辺の標高50～60メートルの台地上に位置していた。No29～36は、富沢から大野田・長町南にかけて分布し、いずれも沖積地にある標高10メートルほどの自然堤防に位置していた。これらの標高が低い沖積地から発掘された遺跡により、縄文集落が古い段階から仙台平野の沖積地に進出していることが証明されていた。No39、40は、名取川と広瀬川の合流点より東の若林区今泉・日辺周辺に位置し、さらに標高の低い沖積地にある3メートル前後の自然堤防に位置していた。この分布状況は、後期中頃において縄文集落が仙台平野の中央部まで拡大していたことを示している。七北田川中流域のNo42～44は、泉区七北田公園とその周辺に位置しており、七北田川沿いの低い段丘に拡大した中期の集落の様子を分析することが可能な遺跡群といえる。

Ⅲ．市内の遺構、遺物について

竪穴式住居跡は、掲載した45遺跡（表1）の中から20遺跡が見つかった。

一番多いのは、No25：山田上ノ台遺跡の38棟である。No4：観音堂遺跡とNo30：下ノ内遺跡からは、複式炉を持つ敷石住居跡が見つかった。

土坑も多くの遺跡で多数見つかった。その用途は、落とし穴や貯蔵のために使われて

おり、その中から様々な遺物も発見されている。このような遺構・遺物の発見は、豊かな自然の恵みを受けながら1万年以上にわたり続いた採集・漁労・狩猟などの活動や当時の人々の精神文化などを推測するための大変貴重な手がかりといえる。

配石遺構が見つかったのは、5か所のみに留まる。この現状は、配石遺構が大変貴重な遺構であることを示している。No32：下ノ内浦遺跡では、後期前半の墓壇約120基、配石遺構9基、埋設土器5基、死者が身に付けていた土製の耳飾りや鉢形土器が出土している。No35大野田遺跡は後期前半の2時期にわたる墓域が重複して発見されている。新しい墓域は、3基の組石状配石と22基の埋設土器を配する環状集石群とその外側を取り巻く配石群で構成されている。古い墓域は、14基の配石遺構と8基の埋設土器で構成されている。埋設土器は、乳幼児用の墓と考えられるため、長期にわたる共同墓地ではないかと考えられる。

土器は、ほとんどの遺跡から出土している。出土した土器から遺跡の年代が推定されている。貴重な土器は、市内の遺跡からも見つかったが、今回のレポートにおいて土器についての説明を割愛した。

土偶は、13遺跡から見つかった。No34：伊古田遺跡からは、国内最大級の大きさで市の有形文化財となっているほぼ完形の土偶4点が出土している。No35：大野田遺跡からは、ハート型を主体とする300点近くの土偶が出土している。

石器の種類には、石鏃、石槍、磨製石斧、石匙、石錐、磨石、敲石、石皿、石篋、搔器、凹石などがある。これらは、ほとんどの遺跡から出土している。岩偶は、No44：高柳遺跡とNo31：六反田遺跡から出土しており、石棒は4か所の遺跡から出土している。珍しい石製品として、石製塊状耳飾り、石刀、独鈷石、釣針型石製品なども出土している。

その他、各種土製品、硬玉製・サメの歯製の垂飾品なども出土している。

No35：大野田遺跡からは、数点の鹿角製の釣針と銚が出土している。また、その近くのNo34：伊古田遺跡からは、漁網用とみられる石錘が出土している。さらに、No31：六反田遺跡からは、ブリ、クロダイ、サケ科などの魚骨が出土している。これらの出土品は、この地域の人々が、海とのつながりのある暮らしをしていたことを示している。

IV．市内の遺跡の特徴

市内では、縄文時代の貝塚が発見されていない。また、泥炭遺跡の調査も行われていない。そのため、貝塚や泥炭遺跡に残されることが多い骨や骨製品、鹿角製品、木製品、繊維製品などは、ほとんど出土していない。

V．まとめ

仙台市内で確認されている約240か所の縄文遺跡の中から「仙台市史特別編2 考古資料」に詳記された45遺跡に関する一覧表（表1）を作成し、当時の地理的状況と遺跡の分布や遺構・遺物の特徴について検討した。特に、出土した遺構や遺物の重要性和遺跡間の繋がりに着目すると、遺跡のある場所が川沿いの段丘や自然堤防に多く分布していた歴史的事実や、時代の経過とともに縄文集落が内陸から平野部に拡大していった地理的变化が浮かび上がった。また、市内の遺跡からは、多くの竪穴式住居跡や土坑が発見されており、さらに墓域もあることから、多くの人々がこの地域で暮らしていた事実を見出すことができた。土偶も数多く出土しているという事実は、縄文人の生活において欠かすことのできない精神文化としての意義を示していると考えられる。

本稿を終えるにあたり残念なことは、市内の遺跡から貝塚がいまだ発見されていないという事実である。東松島市の里浜貝塚のよう

に、貝塚から人骨が見つければ、その人骨の分析等によってさらに数多くの事実がわかるはずであろう。現在、縄文遺跡の発見は名取川流域に集中しているが、今後は広瀬川下流域で新たな発見が生まれることを期待したい。

おわりに

市内の遺跡の位置は、現住所だけで検索しても見当がつかなかった。そのため、筆者は、表1を作成するにあたり、遺跡の近くにある目印を探し出すことを試みた。そして、いくつかの遺跡の上を気付くことなく歩いていたことに驚いた。今まさに、「あそこに遺跡があったのか」という心境の中にいる。

せっかく遺跡の存在を示す場所を訪れても、遺跡の表示がないところが多いため、当時の具体的なイメージは持ちにくい現状にある。筆者は、見えない遺跡の上に立ちながら、遥か何千年前の縄文人に思いを馳せてみるが、その景色は今と全く異なるものであろう。今回、地理的変遷を含めて検討したことにより、現在の海や川の位置は当時と大きく違っているけれども、遠方を見渡せば当時の山並みだけは現代と似ているかもしれないということに気付いた。われわれが暮らす場所には多くの遺跡が眠っている可能性がある。今回、足元の地下深くに眠る悠久とした縄文の痕跡に触れることができた。稿を終えるにあたり、今後も古代の痕跡と現在との繋がりに畏敬の念を持ちながら古代の歴史探求に関わっていききたいと思う。

表1 仙台市内の縄文時代遺跡概要一覧

<広瀬川水系>

No	遺跡名	場所	目印等	時期区分	住居跡	土坑	配石	土器	土偶	石器	その他	特記事項
1	野川	青葉区熊ヶ根	「熊ヶ根」バス停付近	草創期		2		30以上		500以上	石器が土坑から「一括埋納（デポ）」、「埋蔵物（化財。市内で最キャシュ）」状態でみつかる	土器と石器が宮城県指定重要文化財。市内で最も古、数少ない草創期の遺跡
2	蒲沢山	青葉区赤坂	赤坂3号公園付近	早期～前期	22（炉跡有）	有		有		600	草創期のエンドスクレーパー、局部磨製石斧等	前期初頭の集落の様子を知る上で貴重
3	北原街道B	青葉区上愛子	仙台高専広瀬校の西	前期				有	3	有	珧状耳飾3	
4	観音堂	青葉区下愛子	宮城総合支所南の国道48号線付近	中期	5（炉跡2）	有		有	有	有	埋設土器、円盤状土製品有、敷石住居有	
5	芦見	青葉区錦ヶ丘	錦ヶ丘小学校の北	後期				有		有	石棒等有	
6	一本杉	青葉区落合	広瀬高校付近	中期～後期	1	2		有		有	埋設土器有	
7	青野木H	青葉区芋沢	苦地集落センターの東	中期					有		大型土偶の左腕部採集	

<名取川水系>

No	遺跡名	場所	目印等	時期区分	住居跡	土坑	配石	土器	土偶	石器	その他	特記事項
8	上ノ原	太白区秋保町長袋	西仙台変電所付近	中期				1			皮袋形土器、仙台市有形文化財に指定	*
9	原	太白区秋保町長袋	秋保中学校の北東	中期、後期				有		有	石棒有	*
10	細野原	太白区秋保町湯元	天守閣自然公園の北西	不明				有		有	石皿有	*
11	大貝中	太白区坪沼字大貝中他	国道286号線沿、大貝橋付近	早期、前期		54（落とし穴14、大型10、焼壁1）		有		有	埋設土器有、遺物包含層有、溝跡2	前期の集落が存在した可能性有り
12	川添東	太白区茂庭字川添東	秋保街道と国道286号線交差付近	早期、前期、中期、晩期	8（炉跡有）	59（落とし穴有）		有		有	埋設土器有、溝跡2	狭い段丘面を、居住、狩猟の場として利用
13	相ノ原	太白区坪沼字相ノ原	国道286号線沿、赤石橋の南東	前期～後期		38（落とし穴有、貯蔵穴有）		有		有	独鈷石（近くの赤石観音堂の宝物として保管）	
14	門野山囲	太白区茂庭字門野山	茂庭金剛寺の北	後期、晩期				有		有	完形の石刀有	近くに嶺岸遺跡もあり、付近一帯に後期から晩期の集落存在したと推定*
15	梨野A	太白区茂庭台	茂庭台3丁目北集会所付近	早期、中期、後期	2（炉跡有）	30		有		有	ピット67、埋設土器2、墓壇4	縄文時代のほぼ全般にわたる活動を示す貴重な遺跡

* 発掘調査未実施

No	遺跡名	場所	目印等	時期区分	住居跡	土坑	配石	土器	土偶	石器	その他	特記事項
16	町田	太白区茂庭町北	生出郵便局付近	早期～晩期		24 (落し穴有)						
17	嶺山 A	太白区茂庭台	茂庭台 2 丁目公園付近	後期～晩期		16 (落し穴有)		有		有		土坑が谷の方向に弧状に配置
18	沼原 A	太白区茂庭台	徳洲会看護学校東側の 31 号線付近	前期～晩期		11 (落し穴有)		有		有		土坑が谷の方向に弧状に配置
19	嶺山 B	太白区茂庭台	茂庭台 1 丁目南公園付近	早期、中期～晩期		1 (落し穴)		有		有		狩猟用に適した地形
20	上ノ原山	太白区茂庭字上野原山	茂庭浄水場の南	早期、前期	2	30 (落し穴有)		有		有		土坑は狩猟用と考えられる
21	茂庭けんと う城跡	太白区茂庭字生出前	茂庭団地と人來田団地の間、自動車道西側	早期～晩期	2 (炉跡有)	30 (落し穴有)		有		有	埋設土器 1	後期後半の住居跡有、貴重。一帯は縄文時代全般的に人々の活動の場と推定
22	人來田	太白区人來田	人來田 3 号公園付近	中期	1 (炉跡 5)	有		有		有	埋設土器 1、多数の柱穴有	炉の石組の形状等から、宗教的遺構と考察される
23	御堂平	太白区鉤取字御堂平	仙台北高校付近	中期		1		1			埋設土器 1	中期後半の大木 9 式期の土器は貴重
24	北前	太白区山田北前町	鉤取球場の東	早期、前期、中期	13 (炉跡 5)	38 (フラスコ状 15)		有		有	竪穴遺構 1、埋設土器、大型住居跡、環状石製品有	非実用的な釣針型石器が出土したことから墓と考えられる土坑有
25	山田上ノ台	太白区山田上ノ台町	「縄文の森広場」付近	前期、中期、後期	38 (炉跡有)	320 以上 (フラスコ状有、落し穴有)		有	有	有	遺物包含層有。敷石住居有。埋設土器 5、土製腕輪、耳飾、石棒等有	内陸部の典型的な集落跡で重要、「縄文の森広場」として整備された。
26	山田条里	太白区鉤取字等	「縄文の森広場」の南	不明		3 (落し穴有)		有		有	炉跡 2、屋外炉の可能性有	
27	上野	太白区富田字	金昌寺の西	中期	有 (炉跡有)	有 (フラスコ状有)		有	有	有	三角形土製品、土製円盤、有孔石製品、翡翠製垂飾品、皮袋型土製品有	遺跡の西側は居住地域、東側は貯蔵地域と考えられる
28	三神峯	太白区三神峯	三神峯公園付近	前期	8			有	有	有	土器埋設遺構 1、玦状耳飾有	多量の土器、石器が層位的に発見、土器の編年研究にとって貴重。竪穴住居は遺跡全体では多数存在すると推定
29	富沢	太白区長町南、富沢	「地底の森ミュージアム」周辺一帯	早期、前期、晩期	1			有		有	前期頃の十和田火山起源の火山灰が発見	
30	下ノ内	太白区富沢	地下鉄富沢駅西隣	中期、後期、晩期	3 (炉跡 2)	35		有	有	有	埋設土器 2	複式炉を持つ敷石住居、建て替えによる新旧の複式炉有
31	六反田	太白区大野田	大野田小学校付近	中期、後期	14 (炉跡 2)	114	6	有		有	埋設土器 2、柱穴列 3、岩偶、南境式土器有	魚骨出土により海での漁撈活動の可能性示す。沖積地の縄文集落の全体像を知ることができる

No	遺跡名	場所	目印等	時期区分	住居跡	土坑	配石	土器	土偶	石器	その他	特記事項
32	下ノ内浦	太白区 長町南	仙台市体育館の東	早期、後期	2	18 (落し穴)	9	有	有	有	墓壇 120、埋設土器 5、日計式押型文土器、土製耳飾、土製円盤、腕輪型土製品有	集落の墓制を知ることができる。名取川下流域の沖積地が古くから活動の場であったことを示す
33	山口	太白区 富沢	仙台市体育館付近	早期、前期、中期、晩期		13		有		有	埋設土器 1、石冠、サメ類の歯製垂飾品、イノシシ型土製品等有	花粉分析より遺跡周辺の後期から晩期の植生が復元
34	伊古田	太白区 大野田	地下鉄富沢駅付近(東側)	後期				有	有	有	後期の遺物包含層(南北 40m×東西 8m)より土偶、土器、石器等出土	土偶 4 点は市の有形文化財に指定。国内最大級の土偶も有。土器の文様が編年研究にとって貴重な物有
35	大野田	太白区 大野田	太白消防署長町出張所の東	前期		20	17 以上	有	270	有	埋設土器 30 以上、掘立柱建物の柱穴、ハート型土偶、完形の大型土偶、異形土器、石刀、硬玉製垂飾品等有。鹿角製の銚や釣針等の漁撈具や鳥や獣、魚の骨が出土	墓と考えられる配石遺構有。墓域と祭祀の場が一体となった場所と考えられる
36	王ノ檀	太白区 大野田	大野田郵便局東の道路付近	後期		40 (プラスチック状有)	有	有	有	有	竪穴遺構、埋設土器、スタンプ状土製品、耳飾有	
37	郡山	太白区 郡山	郡山中学校周辺一帯	後期		5		有			性格不明の遺構 2 (うち 1 基は住居跡の可能性有)	郡山低地東半部に後期から集落が存在したことを示す
38	南小泉	若林区 遠見塚	遠見塚古墳周辺一帯	晩期				有		有		
39	今泉	若林区 今泉	南部道路今泉インターの北	後期、晩期				有				高田 B 遺跡の集落の一部であったと考えられる
40	高田 B	若林区 日辺字	南部道路今泉インターの西	後期、晩期	1 (炉跡有)			有				後期中頃の海岸寄りの平野部での住居跡は県内で最初の例、集落が名取川下流域まで拡大していたことを示す

<七北田川水系>

No	遺跡名	場所	目印等	時期区分	住居跡	土坑	配石	土器	土偶	石器	その他	特記事項
41	紫山	泉区寺岡	寺岡小学校の南西	早期～晩期	3			有		有	集石遺構 5	
42	沼	泉区上谷刈	上谷刈仮屋敷公園付近	中期	8 (炉跡有)	40		有		有	埋設土器、中期の遺物包含層(南北 40 m × 東西 10 m)	
43	赤生津	泉区七北田字	七北田公園付近	前期～後期		6		有	3	有	晩期の遺物包含層、焼土遺構 6、土玉、石棒等	
44	高柳	泉区七北田字	高柳公園付近	中期		56	7	700 以上	65	有	中期の遺物包含層(東西 15 m × 南北 50 m)、土笛 2 他様々な土製品、岩偶、列石 1	出土遺物量が豊富なことから周辺一帯には中期の大規模集落の存在が推定
45	長岫	泉区南光台東	南光台東中学校の東側住宅地	早期、前期、晩期	1 (晩期) (炉跡有)	9		有		有	早期～前期の竪穴遺構 1、滑石製塊状耳飾等	晩期の住居跡としては市内唯一の発見例

表 2 縄文時代の時代区分と土器編年

年代	時期区分	土器型式	おもな遺跡
10,000年前	草創期	(多縄文系土器)	野川遺跡
	早期	(野縄文系土器) 明神裏Ⅱ式 大寺式 榎木Ⅰ式 紫山Ⅱa式 紫山Ⅱb式 船入堀下層式	下ノ内溝遺跡 梨野A遺跡 富沢遺跡 紫山遺跡 川添車遺跡 北前遺跡 山口遺跡
		上川名Ⅱ式 大木Ⅰ式 大木Ⅱa式 大木Ⅱb式 大木Ⅲ式 大木Ⅳ式 大木Ⅴ式 大木Ⅵ式	蒲沢山遺跡 大貝中遺跡 三神塚遺跡 北原南道日遺跡 北前遺跡
		大木Ⅶa式 大木Ⅶb式 大木Ⅷa式 大木Ⅷb式 大木Ⅸ式 大木Ⅹ式	山田上ノ台遺跡 上野遺跡 高柳遺跡 上野遺跡 高柳遺跡 上ノ原遺跡 北前遺跡 梨野A遺跡 山田上ノ台遺跡 沼遺跡 下ノ内溝遺跡
	中期		
5,000年前	前期		
	後期	南境式(宮戸Ⅱb式) 宝ヶ塚式(宮戸Ⅱa・b式) 金剛寺式(宮戸Ⅱa・b式)	六反田遺跡 大宮田遺跡 下ノ内溝遺跡 伊古田遺跡 高田遺跡 王ノ塚遺跡 浅瀬けんとう城跡 野山遺跡
	晩期	大淵B式 大淵B C式 大淵CⅠ式 大淵CⅡ式 大淵A式 大淵AⅠ式	赤生津遺跡 南小泉遺跡
2,300年前	弥生時代		

参考・引用文献および web サイト

仙台市史編さん委員会編(1995)『仙台市史 特別編 2 考古資料』仙台市

仙台市史編さん委員会編(1999)『仙台市史 通史編 1 原始』仙台市

「仙台市の遺跡(仙台市 HP)」

<https://www.sendai-c.ed.jp/~bunkazai/is-ekidb/>(最終閲覧日 2023.1.25)

引用図版

図 1 筆者作成(Googlemap に加筆)

図 2 仙台市史編さん委員会編(1999)『仙台市史 通史編 1 原始』仙台市

表 1 筆者作成

表 2 仙台市史編さん委員会編(1999)『仙台市史 通史編 1 原始』仙台市

市民文化財研究員活動報告書 27

発 行 日 令和 5 年（2023）年 3 月 31 日

編集・発行 公益財団法人 仙台市市民文化事業団

仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）

〒 982-0012 仙台市太白区長町南 4-3-1

TEL 022-246-9153